

講演録

「今枝先生にきく

ブータン仏教とGNH(国民総幸福)に見る幸せのかたち」

開催日時：2013年11月24日(日) 14:30~16:30

開催場所：明治学院大学白金キャンパス 本館2階1252教室

講演者：今枝 由郎(元フランス国立科学研究センター、CNRS)

主催：ナマケモノ倶楽部 <http://www.sloth.gr.jp/>

協力：ナマケモノ倶楽部ブータンGNHツアー参加者有志

今日の講演会のテーマは、「GNH (Gross National Happiness、国民総幸福) やその根底にある仏教思想を学び、日本における幸福の価値観を問い直す機会とする」とありますが、これは僕が付けたものではなく、この会の主催者側が掲げられたものです。しかし、ある面では僕が話そうと意図したことと一致するところがありますので、この線に沿ってお話することにします。

このテーマのキーワードは、「GNH (国民総幸福)」と「仏教」で、僕の話も当然この2つが中心となります。テーマそのものではありませんが、もう一つ問題としたいのは、ただ単に「価値観を問う」ではなく、「価値観を問い直す【、、】」と、「直す」という言葉が入っている点です。主催者側がどういった意図で、ただ「価値観を問う」ではなくて、「価値観を問い直す【、、】」と「直す」を加えられたのかわかりませんが、僕は僕なりに、この点に一つの重要な意味を見つけますので、最後に説明することにします。

最初にGNHという言葉ですが、ほとんどの方はご存じだと思います。知らない方はいますか？ GNHがどういう言葉か、ほとんどの方はご存じですね。ご存じなので詳しくは説明しませんが、ブータン第4代国王が提唱した理念として、日本語では「国民総幸福」と訳されています。しかし、これに関して大方の人は正しく理解していません。今日こうした場で、一般人向けにGNHを取り上げること自体、本来からすればまったくお門違いなことなのです。幸福という身近な言葉が入っているがゆえに、一般の人も自分に関係ある概念だと思ってしまいます。でも、これを最初に提唱した第4代国王は、国民の一人ひと

りが自分の幸福を考えるという立場から発言したのではありません。まずそこを第一に理解する必要があると思います。GNH（国民総幸福）は、一般人向けの幸福論とか人生観ではなく、国家元首、国王としての立場から、国の発展・開発の在り方を考えた哲学・理念ということで、一般の人には関係ありません。一般の人は、その恩恵に浴するという受け身の立場だけです。ブータン第4代国王は、自分の任務は国民が幸福になれる枠組みを作ることである、という思いから、国の開発の在り方として考え出したのがGNHという概念です。ですから、一般の人がそこから直接自分の幸福を問う、問い直すための参考には一切なりえません。

GNHという言葉・概念の提唱者が、第4代国王であることは異論の余地がありません。しかし長い間注目されることはなく、国際的に認知度が上がったのは21世紀に入ってからです。ですから、この言葉が初めて使われたのがいつなのか、はっきりとしていませんし、国王自身も明言していません。

このことに関して、まず認識すべきことは、GNHは英語の Gross National Happiness の頭文字をとった略号である、という自明のことです。ところが、4代国王はブータン国内ではゾンカ語というブータンの国語しか使わず、一切英語は話しません。GNH「国民総幸福」にあたるゾンカ語の言葉は、あるにはありますが、英語のGNHから逆にゾンカ語に訳された新造語です。そして、ブータン国内ではあまり普及していませんし、4代国王は1度も使ったことがない言葉です。4代国王が即位以来、常日頃口にしてきたのはゾンカ語で「ガ・トト、キ・トト」です。これは、日常的に誰もが使うし、誰にもわかる、非常に単純な形容詞で、日本語に訳すと「たのしく、うれしく」という意味です。彼がいつも言っていたことは、政府の究極目的は、国民が「ガ・トト、キ・トト」、「たのしく、うれしく」いることという単純明快なことで、概念とか理念といった大げさなことは何ともありません。

GNHという言葉が初めて使われたのはいつかということに関しては、さまざまな説がありますが、1979年という説が一番有力です。4代国王は、1972年に16歳で即位しています。その2年後の1974年に戴冠式が行われ、対外的にも世界最年少の国家元首として知られるようになりました。それから5年して、初めてインド圏以外での国際会議に出席しました。それが面白いことに、キューバのハバナで行われた非同盟運動（ノン・アラインド・ムーヴメント）の第6回首脳会議で、カストロ首相の招待に応じたものでした。この非同盟運動は、インドのネルー首相の時から始まったもので、東西冷戦のときの東側陣営にも西側陣営に加盟しない国々による大きな動きで、アフリカとアジアの大

半の国が加盟し、一時は非同盟77か国とか言われました。その首脳会議にブータン国王は初めて国家元首として出席しました。インドが中心になって行っている大きな国際会議ということで、インドのメディアは非常に注目していました。

ブータン国王が帰路インドを経由するというので、インドの記者団がボンベイ空港でインタビューを申し込み、例外的に国王が答える形になりました。その時インドの記者団は、ブータンのことをほとんど知らなかったのので、冒頭に「私たちはブータンのことをまったく知りません。まずはGNPがいくらか教えてください」と質問しました。それに対して国王は「私は、GNPが何なのか知りません」と答えました。そしたらインドの記者団が「それはありえないでしょう。国王が出席された首脳会議の中心議題の一つがGNPであったわけですから、それをご存じないということは信じられません」と反論しました。そしたら、4代国王が「とにかく私は知りません。人間は人それぞれ領域が違っていて、知っていること、知らないことは、人により異なります。それでは逆に、私の方から皆さんにお聞きしますが、GNHを知っていますか」と切り返しました。記者団は「GNPなら誰でも知っています。でもGNHなんて知りません」と答えました。すると国王は「あなた方は、私がGNPを知らないということはありえない、と言うけれども、逆に私が知っているGNHを、あなた方は知りません」。そこで記者団は「わかりました。では、GNHとは何ですか」と質しました。それに対して国王は「GNHは、Gross National Happinessで、このほうが、GNPすなわちGross National Productよりも大切です」と答えて、インタビューを終えたとのこと。僕はこの話をその時に随行していた側近の一人から聞きました。真否の程は確かめようがありませんが、おそらく僕はそれに近いことがあったのだと思います。これが、GNHという英語の略号が用いられた最初だと思います。

英語でのインタビューでしたから、そう言ったわけですが、その時に4代国王がGNPに対する、あるいはそれに代わる指数としてGNHというものはっきりと念頭に置いてたかという、決してそうではないでしょう。それはいろんなことから傍証できますけども、おそらく4代国王は記者団をはぐらかすために、ユーモアたっぷりにそう答えたのでしょう。国家元首としての彼は、ブータン国内では一般の人からの質問を受けるという経験はありません。それがボンベイで初めて、ややもすれば攻撃的なインド人記者団のインタビューに応じたのですが、それを快しとしなかったという面もあるでしょう。

これは、考えてみればよくわかることだと思うのですよね。ブータンという小さな国では何をすることも本当に直接対話ができ、打ち解けた話し合いができます。ところが、100人近くの国家元首、政府首脳が集まり、アジェンダが決まっている会議は、彼としては

初めてでした。それに出席して、こうした形式的な大会議の空虚さ、不毛さを感じたのではないかと思います。第4代国王は16歳で国王になりましたが、1979年ということは、まだ24歳です。それが、非同盟首脳会議のような国際的な大会議で、世界最貧国の世界最年少の国家元首ということで、まったく相手にされず、存在感も薄かったのだと思います。一国の国家元首として、一つの尊厳を傷つけられた、とまでは言いませんが、それに近いことを感じたのだと思います。

そうした会議からの帰路、インドの記者団からの質問を受けたのですが、それにはさほどの意味を認めなかったが故に、今紹介したような形でインタビューを打ち切ったのでしよう。いずれにせよ、これが彼が英語でGNHという言葉を使った最初でした。しかしその時のインドの新聞には、GNHという言葉は活字にされませんでした。ですから、GNHという言葉が初めて使われたのは1979年でしたが、その言葉は一切浸透せず、それ以後4代国王がこの言葉を使ったことはありません。

GNHという言葉が、国際メディアに初めて登場するのは、1987年になってからで、経済分野では最も権威のあるイギリスの新聞ファイナンシャル・タイムズの紙面上です。長らくデリー駐在員であったジョン・エリオットという記者が、ブータン国王との単独インタビューを例外的に許可されました。その当時、ブータン通の人たちが一番気にしていたことは、4代国王の結婚相手が誰に決まるかということでした。誰を王妃に選ぶかということが問題になっていた背景には、すでに公の秘密ともいえることでしたが、4代国王には4人姉妹の相手がいて、その4人ともに子供がいるという事実がありました。でも公には結婚もしていないし、子供も認知されていませんでした。しかし、おそらくその4人姉妹のうちの誰か一人を王妃に選び、子供も認知するだろうという憶測がありました。そういう状況の中で、単独インタビューが許可されたわけです。ジョン・エリオットは回想録の中で、ブータンの外務大臣から「国王に何を聞いてもいいが、結婚相手の問題だけは触れないように、と釘を刺された」と記しています。彼は約束を守り、結婚問題には触れずに、「目覚めへの近代的道のり」という記事を書きました。それが掲載されたのは、1987年5月2日の週末版でした。

そのなかで彼は、「4代国王は、自分の国民の命運が若くて経験もない自分の両肩にかかっているという現実の責任の重さを認識した上で、どうしたらよいのか思索している、むしろ不安がっているようだった」と述べています。ジョン・エリオットは記事の中でGNHという言葉を使ったわけですが、国王が英語でのインタビューの時に自分のこれから達成しようとしていることを述べるのに、経済発展、物質的な発展ではなく、国民を幸せ

にすることを念頭に置きつつ、GNHという言葉を使ったからだと思います。ジョン・エリオットは「国王はまだ思案中であって、自分の国の置かれた事態を非常に深刻に認識している」と書いています。おそらくそれは、当時の4代国王の心境というか、彼が置かれていた状況を忠実に伝えています。これを踏まえると、4代国王が、1972年の即位当初からはっきりとGNH（国民総幸福）ということを考えていたわけではないということがわかります。その傍証になりますが、1981年から1990年までをブータンで過ごした僕個人の記憶には、GNHという言葉聞いたことは1度もありません。ゾンカ語でも、英語でも、そうです。僕はブータンのメディア全部に目を通してはいたわけではありませんが、とにかく一般の日常会話でこの言葉を聞いた記憶はありません。当時始まってまもない第5次5カ年計画の目標・タイトルは、「ランゴ、ランツェン」で、「自分の頭は自分で持ち上げる」、すなわち経済的に自立するという意味の言葉でした。それが当時のモットーであり、政府の合言葉でした。

3年間程は外国からの大規模な援助を受けて、ブータンの森は、木材としてインドに輸出でき、すぐにお金になるということで、大きな工場を建て、林業に力を入れました。それが軌道に乗りかけたところで、国王の決断でこの方針が一挙に変わりました。これがブータンの見事なところ。4代国王は、経済開発がある程度進んでしまうとコントロールできなくなり、どういう結果が待ち受けているか、ということを一早く感じ取りました。ジョン・エリオットの言葉を借りると、4代国王は「とてつもない貪欲な外国の巨大な資本を受け入れたら、この国がどうなるのか」を敏感に悟ったのだと思います。

その結果、1980年代中頃からは、外国からの援助は非常に小規模なものしか受けなくなり、そのなかでなんとか国の将来を築いていこうという模索が始まりました。1987年にジョン・エリオットがインタビューした時、国王は外国の援助をむやみに受け入れることは決してよくない、とわかっても、ではどうしたらよいのか、ただ援助を受けないだけでは貧困になってしまうし、取り残されてしまうかもわからない、という先が見えない時代でした。それがはっきりと見え始めたのは、それから十年程先のことです。

その理由のひとつには、ブータンの内政事情があります。1980年代の終りから90年代にかけては、いわゆるネパール系の住民問題がありました。ブータンはそれまでヒマラヤの桃源郷といわれていましたが、それを境に全く逆転し、ネパール人を追い出して民族浄化をするヒマラヤの悪玉とされました。1990年代には、国際メディアからの非難の的、標的でしかありませんでした。その問題がようやく落ち着いたのは20世紀の最後になってからです。その間ブータンは国民総幸福どころではなく、これに関してほとん

ど何の発言もありませんでした。

この言葉がようやく注目されるようになったのは、ブータンの首相ジクミ・ティンレイが2002年の国連総会で、ブータンの目標はGNHであると再度声明して以後です。それに敏感に注目したのは、ファイナンシャル・タイムスの記者リチャード・トムキンスです。彼は、2003年度的最優秀経済ジャーナリストとして表彰された人です。いわゆるバブル崩壊後の経済の混乱によって、先が見えない中で、ポスト物質主義の時代に入り、新たな目標、新しいパラダイム、新しい指標を探す必要がありました。その時に小国ブータンが唱えていることは注目に値する、ということをファイナンシャル・タイムスに寄稿しました。これがGNHという言葉が世界的に認知される一番のきっかけを与えたと思います。

それと並行して国連は、紀元2000年が終わり、新しいミレニアム（千年紀）に入った人類の歴史にとっての新しい指針・目標の模索を始めました。それがMDG（ミレニアム・ディベロップメント・ゴール）すなわち「新千年紀開発目標」で、総会で決議されました。ブータンの首相は、物質的な発展に終始するのは産業革命以来の古い考え方であって、2001年からの新しいミレニアム（千年紀）の新しい理念のなかにはやはり幸福が入るべきである、と主張しました。それをリチャード・トムキンスは新しい理念として評価したわけです。

その後徐々にですけれど、GNHの認知度が高まり、その結果として実現したのが今年2013年の3月20日から始まった「国際幸福の日」です。これは、国連の場におけるブータンのイニシアティブ、努力の成果です。3月20日は、日本ではそれほど注目されませんでした。ブータンでは3月20日が「幸福の日」として新たに国の祝日に制定されました。MDG（ミレニアム・ディベロップメント・ゴール）は、2015年を一つのメドにいろんな活動をしています。それは主に、貧困層の底上げ、乳幼児死亡率の低下、識字率の向上といったことですが、2015年に新たに設定される次の指針ではおそらく幸福ということが強く打ち出されるであろうと予測されます。

近代に入り、特に産業革命以後、人類は物質的な面では目覚ましい発展をとげました。産業革命が始まった頃の人からすれば、現在はユートピアに近い快適さ、利便さ、豊かさを実現されました。しかし、こと精神面に関してはそれほどの進展がなく、新しい発展のあり方を考え直す必要があるという風潮が生まれました。経済が発展さえすれば、人類は幸福になれる、と信じきっていたところが、これだけ経済発展をとげたにもかかわらず、あるいはそれがゆえに、以前よりも不幸になった、あるいは以前よりも人間にとって厳し

い状況が生まれてきた、という認識をふまえて模索している時に、プータンがGNH（国民総幸福）という理念・指針を提案しました。これは本質的に異なった価値観からの提案であり、時流に合ったということもあり、広く認知され、支持されたわけです。その後は、GNH国際会議が開かれたりして、GNHをただの理論・理念ではなく、数値化・方式化する作業が行われています。いろんな出版物もありますから、参考にお読みになったらいいと思います。僕が4代国王に会って直接聞いた時には、彼自身はそんなことを意に介していない感じでした。よく知られたことですが、カール・マルクスは、自分の経済理論が広まって、特にフランスの学者たちがマルクス主義とって、彼の理論を取り上げて論議している時に、「私はマルクス主義者ではない」と言ったとされます。それと同じく、4代国王の気持ちからすれば「GNHというのは、わたしが考えて提唱した、と言われているけれども、私とは関係がない」というくらいのスタンスを持っているのだと思います。

GNHにはそういう背景がありますが、今非常に注目されていますし、注目されるに値する言葉、概念だと思います。けれども、4代国王と直接結びつけることは、当たっている面もありますが、当たっていない面もあります。GNHは、出発点からして本質的には開発理念であって、一般にいわれる幸福論ではありません。

次は、もう一つのキーワードである「仏教」に移りましょう。4代国王の生き方、考え方の一番の根底をなすのは、やはり仏教であることはまちがいないと思います。彼は中学から高校にかけて短期間のあいだイギリスの寄宿舎に入りました。僕が直接聞いたところ、「わたしは、イギリスおよび外国からの影響を受けた、と思うことはない」とのことでした。プータンで生まれ、国内で育って、プータンの伝統的な価値観に徹しています。かといって、外のものを排斥するといった排他的なところはありません。彼自身の価値観、プータンが20世紀後半まで受け継いできた伝統、その柱は仏教ですね。

ここで問題になるのは、最初に触れた「仏教思想を学び、日本における幸福の価値観を問い直す」ということです。多くの日本人は「日本もプータンも同じ仏教国だから」という立脚点に立っていると思います。確かに仏教は、日本人にはなじみのある言葉ですし、宗教形態として身近なものです。現在でも神社仏閣があちこちにあり、いろんな年中行事を介して、誰もが仏教を知っていますし、接しています。でも、そこが落とし穴だと思います。日本仏教とプータン仏教は、「仏教」という同一の言葉ですがけれども、その内実はおよそ似ても似つかないものです。ことに日本の仏教は、奇形ともいえる特殊なもので、さっき触れたマルクスの「私はマルクス主義ではない」という言葉を、もし日本の仏教に

適応するとしたら、インドで2500年前に生まれたブッダは、今の日本の仏教を前にして、おそらく「私は仏教の開祖ではない」と言うと思います。

その点、ブータンの仏教はインドから直接伝わり、チベット語に訳された仏教が、ヒマラヤを越えて伝わった正統な仏教です。一方日本の仏教は、インドからシルクロードを経て中国に伝わり、中国の漢文に訳され、それが伝わったものです。この歴史的背景からして、両者の間には大きな本質的な違いがあります。この点をきっちりわきまえないで、ブータンのGNHから、あるいはブータンの仏教から、日本においてものを見直す、問い直すということは非常に難しいですし、そうしたアプローチからは実質的に得られるものはないでしょう。

そうなるとう結局のところ、日本で幸福という問題を考える時に、ブータンに関する知識、あるいはブータン仏教云々という以前に、まずなすべきことは、日本人が仏教とは何なのかを問うことだと思えます。

このことに関して、僕の恩師の一人に五来重【しげる】という先生がいます。ご存じの方もおられるかもしれませんが、『高野聖【ひじり】』という名著を書いた日本仏教史研究、仏教民俗学の第一人者です。彼はある著作で一言「日本の仏教は誤解から始まった」と述べていますが、僕はまさにそうだと思います。その誤解のままに1500年の伝統、歴史が作られてきました。

538年あるいは552年に仏教が日本に伝わった、と『日本書紀』などの歴史書に書いてあります。しかし「仏教伝来」といっても、実際に何が伝わったかと言いますと、百済の王から日本の皇室へ仏像が届けられたということです。お坊さんが来たわけでも、仏典が伝わったわけでもありません。当時の日本にはブッダ（「仏」）に相当する言葉はありませんでした。ですから、この仏像は「蕃神」すなわち外国からの神様と記録されています。日本仏教は、こういう見方、受け止め方から始まっているわけです。仏像を日本の神様に準じて受け入れたのですが、何を教える神様なのか、どういう崇りのある神様なのかわかりません。しかし日本人の理解では、どんな神様もお祀りしないと崇りがありますから、それが怖い。ところが、韓国からお坊さんが来たわけでもないのに、どうしてお祀りしてよいのかわかりません。そこで、当時の日本人の宗教感覚・流儀で「蕃神」を祀ることになりました。そこで584年に、11歳の少女、すなわち生娘、処女がその役に任じられました。彼女はやはり、天照大御神をお祀りする、皇室の未婚の女性、すなわち齋宮【さいぐう】に当たるものです。この少女が、日本最初の出家者、仏教徒だと見なされています。しかしそれは、本来の仏教からすればありえないことです。仏教徒になるた

めには、まずは仏法僧の三宝、すなわちブツダ（仏）と、その教え（法）と、それを守る僧侶の集団（僧）、この三つに帰依するのが第一条件ですが、日本にはそれが揃っていませんでした。ですから、仏像を「蕃神」の像と見なして、神道の体系に組み入れ、神道流に祀ったわけですが、これが日本仏教の始まりです。

それ以後、正しい仏教を伝えようとした努力はあります。たとえば、出家・在家の仏教徒の行動規範である戒律を伝えるために、何回も日本への渡航を試み、結局着いた時には盲目となっていた中国人僧鑑真のような例があります。しかし、他の仏教圏と比較して概観してみると、日本仏教は本来の仏教からはかなり逸脱した形で発展し、現在に至っているということを認めざるを得ないと思います。たしかに、仏教は日本人の精神性を豊かにしたことは事実です。日本土着の神道だけではなく、中国からの儒教や道教、そしてインド起源の仏教があいまって、芸術的にも、文学的にも、精神的にも日本に大きなものをもたらしました。ですけれども、仏教に限って言えば、それが本来のものかということ、ある面では本質が完全に忘れられたものとしか言いようがありません。

その点ブータンの仏教は、本質的に違います。ブータンはチベット文化圏の一つで、ブータン仏教はチベット仏教の流れを汲んでいます。チベットへの仏教の伝播は、日本に比べれば1-2世紀ほど遅れます。チベットは8世紀の後半になって正式に仏教を導入しましたが、それに際して最初から国家事業として国費でお寺を建てました。それから出家者、すなわち本当のお坊さんを国費でまかなう形で最初6人許しました。6人の出家者を許すということは、国家にとっては結構大変な費用がかかります。なぜかということ、一人の出家僧侶につき、彼を支えるために6ないし7家族をあてがわなければならなかったからです。お坊さん自身は消費するだけで生産には従事しません。兵役にもつきません。それを認めるということは、国家にとってはかなりな負担なわけです。でもチベットの場合は最初からそうしています。

それともう一つは、当時仏教の中心であったインドのナーランダ寺院から、大僧正を2代連続でチベットに招いています。かれらは、大乘仏教を代表する高僧です。チベット人は、彼らから直接教えを受けました。

その上で、国家事業として仏典翻訳に着手しました。ほぼ半世紀の間に、当時インドで入手できるほとんどの仏典を全部チベット語に訳しました。そのために用語を整備し、辞書を編纂しました。膨大な計画です。それが出発点にありました。ですからインドからの仏教の正統がきちりと伝えられたわけです。その後、一時的に衰えるという時代の変遷はありましたが、今に至るまできちりと続いています。そこがやはり、日本の仏教と

の大きい違いです。

ですからチベット人、ブータン人は、日本人のように中国語のままのお経を意味もわからず、ただ読誦しているだけでなく、全部自分の母国語で読んでいます。母国語といっても古典語ですから、一般の人にはわからない部分もありますけれども、それでもやはり国語です。日本のように漢文のままで一切わからないわけではありません。日本では、お経といえばちんぷんかんぷんなことの代名詞に近いでから、やはり違います。お坊さんのレベルでも、一般信者のレベルでも違います。

ブータンの場合、現在でも平均すると男の50人に一人は、いわゆるお坊さんになっています。その大半は国家公務員の待遇を受けています。国が管理するお寺のお坊さんとして、生涯を終えます。常時4000人から5000人、民間のお寺まで入れたら1万人程の人が僧侶ですし、尼さんもかなりの数がいます。彼らと日本のお坊さんとが一番大きく違うのは、ブータンのお坊さんは、仏教の正統にのっとった宗教者で、私有財産を持たない点です。彼らはお寺に入ったら、家とか車などの私有財産を持つことは許されません。もちろん腕時計、ラジオといった日常生活に最低限必要な私有物は許されますが、それ以上の私有財産を持ちません。

このこと自体が国民の見本になるかというとは決してそうではありません。なぜかというと、一般の国民は家族がいて、営利を追求し、私有財産を持たざるをえません。しかし、自分の身内たとえば兄弟姉妹、おじさん、おばさんに、私有財産を持たず、営利を追求せず、生産活動に従事しないで生きる人たちがいます。そして、一般の人は身近なかれらに対してむしろ尊敬の念を持っています。なぜなら、日常的な接触の中で、普通の生活を営んでいる者にはない次元、オーラを彼らに感じるからです。これは大きなことだと思います。

日本の場合はそれがほとんどなくなってしまいました。いわゆる完全な出家者、本来のお坊さんとして、私有財産を持たない人たちの集団がなくなりました。さらに悲しいことには、明治以降の政策もそれを助長するような形で、日本では仏教者、お坊さんというのはほとんどが寺族として階級化してしまいました。特殊な階級です。すべてではありませんが、ほとんどのお寺には広大な敷地や財産・資産があり、それが宗教法人の名の下に世襲され私有財産化されています。ですから、お寺というのは非常に特殊な特権階級であり、一般の人からするとまったくの別世界であり、接点がありません。意識の上でも、感覚の上でも、大きな断絶があります。それは仏教では特殊なことです。

この点、神道には宮司はいますが、神社は世襲制の私有財産ではありません。宮司と

して神社を一定期間管理しますが、私有財産化していません。ですから宮司の方が宗教者としての本来の形に忠実と言えます。仏教寺院の私有財産化、世襲制が進んだのは、特に明治以後ですが、今ではそれが一般化し、それを疑問視する人もいません。それは一つの仏教のあり方として認めるとして、やっぱり欠けているのは、宗教者としてのオーラを持ったお坊さんが日常生活のなかにいないということですよね。ブータンの場合、お坊さんたちが一般人のレベルと違ったオーラを持ち、一つの生き方の指針を日常的に示しています。ブータンは、それを国家として維持しています。そのためには、かなりな予算を組まざるをえないし、負担も大きいです。それでもブータンの場合、仏教国家としてそれを大前提にして、それを疑問視することはありません。

4代国王のGNHという開発哲学からして、それがやっぱりブータンの人の幸せというか、人生の充足感に寄与するところがある、あるいは少なくとも抵触はしないという立場です。共産主義では、宗教はアヘンであるとか、生産活動に従事しない僧侶は社会の寄生虫であると主張しますが、そういった態度はとりません。かといって、全員がお坊さんになって、生産活動に従事しないということは、国家としては認めるわけにはいきません。ある程度のバランスが必要です。それが国民総幸福という4代国王が提唱した開発哲学です。開発にことさら重きを置かず、国家の在り方としてただただ経済発展一辺倒ではなくて、国民の精神的な充足を実現するためには、国民の中にある割合で僧侶を保つこと、それが重要なことです。それはただ単に、ブータンの社会は昔から仏教社会だったからというだけではなく、精神的な修行を専業にする人たちの存在が、社会的に意義があるという考え方なのだと思います。

ですから日本で今、幸福ということを考えるに際して、ブータンから直接学ぶということは非常に難しいです。個人的にブータンに興味がある、あるいはブータンに行って親しみを覚えたり、心が癒される、と言う日本人が多くいます。僕個人的には、「癒される」という言葉は決していい言葉とは思いません。しかし、「癒される」と感じたところで、そこから今日本の現実のなかで生きる上において、ブータンがなんらかの参考になるかという、実質的にはあまりないと思います。ただ旅行者として行って見て、1週間なりのあいだ、なんか新鮮な気持ちになれる、あるいはさっき言った「癒される」とかいうことはあります。それ自体決して悪いことではないとしても、それは本質的な解決なり、本質的な変革をもたらすものではありません。個人個人のレベルでは、ブータンと日本はあまりにもかけ離れています。そういう中で日本においての幸福の問題を考えるに際して、日本ではまったく変わった形態をとってしまったわけですが、本来の仏教を学ぶのは有

益なことだと思います。

自負するわけではありませんが、僕はほぼ50年近くにわたって、スリランカからミャンマー、タイ、ベトナム、チベットのほぼあらゆる仏教の形態を見てきました。2500年近くにわたって展開し、今に至ったいろんな仏教の形態に接して一番思うのは、やっぱり原点に戻るといことです。

ブッダという人、この人はインドの紀元前5世紀—あるいは6世紀という説もあります—に生きた人ですが、やはり偉大な思想家だったと思います。彼自身は著作を残しませんでした。幸いなことに弟子たちが彼の言葉や教えを、最初は口伝えで残し、現在では書き残されているものが相当数あります。仏教がさらに発展し、後世の人たちによって膨大な文学が生み出されて、とても一人で読み切れる量ではありません。いわゆる8万4千の法門があると言われていています。しかも日本では漢文のまま残されていて、一般の人が読めるものではありません。こういう状況の中で、本来の仏教がどんなものであったかを知るためには、僕の結論としては『ダンマパダ』*と『スッタニパータ』*という2つ非常に短いテキストがお勧めです。紀元前3～2世紀頃に成立したもので、もっとも古い仏教テキストです。非常に短いテキストですから、仏教の全体像を示すものではありません。ですけれども、ブッダという思想家、宗教家が説いたことで、現在の一般の日本人が日常生活で指針とできるものは、この2つのテキストにすべて含まれていると思います。

『ダンマパダ』の「ダンマ」とは真理、「パダ」とは言葉という意味です。このテキストには、423の詩の形でブッダが語った真理の言葉がまとめてあります。いろんな状況のなかでブッダは、いろんな人を相手に教えたり、話したりしました。それが、できるだけ暗誦しやすいように韻文でもってまとめてあります。各々の詩は、8音節4行で32音節ですけれども、日本でいう和歌に近いです。32音節の詩が、423集まっているわけですけど、ブッダのもっとも基本的な教えがまとめられています。

もうひとつの『スッタニパータ』は、まったく別の系統のテキストですが、これも非常に短いものです。この2テキストで、ブッダが考えたこと、教えたことの全体像が把握できると思います。もしもこうしたテキストが6世紀の中頃に日本に伝わり、それを実践するお坊さんたちがいたとしたら、日本の仏教はかなり違ったものになっていたと思います。仏教を実践するお坊さんには一つのオーラがあります。日常生活でブッダの教えをちゃんと実践することから生まれるオーラ。それが日本で継続的に存在していたなら、おそらく仏教は今とはまったく異なった、今の仏教界からは想像もできない形になっていたと思います。残念ながら、1500年にわたる歴史はそうではありませんでした。だからと

いって絶望的で、もう仏教には意味がないということではありません。むしろ逆に、今こそブッダが説いた言葉に触れることができる時代になりました。そうすれば、日常生活のなかでブッダの教えが本当に生きる社会となるでしょう。そうやって初めて日本とブータンが、仏教徒としてお互いにつながる点が生まれ、交流ができます。ところが、日本の現状のままでは、その可能性はむしろゼロに近い状況であると思います。でも諦めたらそれで終わりであって、どこかに糸口を見つけなければいけません。その最初一歩として『ダンマパダ』と『スッタニパータ』の2つのテキストをお勧めします。

今日の講演会のテーマは、ブータンのGNH、その根底にある仏教思想を考えることでした。しかし、今まで説明しましたように、GNHは一般の人たちと関係ないことですし、現在の日本の仏教はあまりにも特殊なものですから、日本における幸福という価値観を問うのには、けっしてふさわしいものではありません。そこで仏教の原点にさかのぼってみたいと思います。そうしてこそ初めて、ブッダがいかに普遍性を持っていた人かということがわかりますし、幸福を問う参考にすることができるでしょう。僕個人的には、ブッダほど普遍性のある言葉を残した宗教家・思想家はいません。他の宗教家 一例えばイエスの批判をするわけではありませんが、彼らは、自分の民族、地域、時代というものの制約の中で、同じ制約を受けた一般の民衆に話しかけました。その教えの中には、非常に合理的なもの、普遍的なものもあるにはあります。しかしブッダは、紀元前5世紀のインドでバラモン教の風土に生きた人ですが、そうした制約 一例えばカースト制— を完全に超越し、別の次元で話しかけた人です。彼が唯一問題にしたことがらは、時代を問わず、政治的、文化的な状況を問わず、人間誰しも人生のさまざまな局面で経験する問題です。すなわち、生きること、老いること、病い、死という苦しみです。仏教で、これらを総称して生老病死の四苦といいます。これは、男であれ女であれ、誰であれ、どの地域の人であれ、どの時代の人であれ、誰もが直面する問題です。これが、ブッダの教えに普遍性がある理由だと思います。

それともう一つは、ブッダは「人間は誰しも幸せを求めている」ということを出発点にしました。だから誰もが共感できます。さらに誰もが共感できるのは、誰もが幸せを求めているのだけれども、全員が望み通り幸せになれるとは限らない、という点です。このものが望み通りにならないということを、ブッダは「苦しみ」と言いました。苦しみというのは肉体的苦痛であるとか、精神的苦痛といった意味ではありません。ブッダが言った本来の意味は、人間の最大の欲望は「幸福になりたい」という願望だけど、幸福になれる人もいないことも事実で、それが苦しみである、ということです。ブッダは、そうい

う人間がおかれた状況の中で、人はどうしたら幸福になれるか、ということを考え、そのための処方箋を見出した人です。その他の事柄、たとえば宇宙は有限なのか無限なのかとか、死後の世界があるかないか、そういうことにはブッダはいっさい拘りませんでした。

こうしたブッダの態度をよく表わしている話を2、3紹介することにしましょう。

ある時マールンクヤという弟子が、何か思い詰めたような気配で、ブッダの許にやって来ました。彼はかねてから、ブッダが「この世界は恒常であるか、無常であるか」、「この世界は有限であるか無限であるか」、「靈魂と身体は同一であるか異なるものか」、「人間は死後も存在するか存在しないか」といった問題に答えないことに不満を抱いていました。そして、

「ブッダが答えて下さらないなら、わたしはブッダの許を去ります」

と迫りました。

そこでブッダはおもむろに答えました。

「マールンクヤよ、ここに毒矢に射られた一人の人がいるとしよう。その時、彼の友だちは、急いで医者連れて来た。ところが彼が『私を射ったのは誰か？ カーストは何で、何という名前で、どんな家系で、身長はどれくらいか？ どんな弓と弦で射ったのか、矢羽根、矢尻はどんなものか？ それがわからない間は、この矢を抜いてはならない』と言い張ったら、どうなるだろう。彼は、その答えを得る前に死んでしまうだろう。

マールンクヤよ、世界は有限か無限か、靈魂と身体は同じか別か、人間は死後もなお存在するか否かに関わらず、人生には病、老い、死、悲しみ、愁い、痛み、失望といった苦しみがある。世界は有限か無限かといった問題の解決は、無用であり、人生における苦しみの消滅にはならない。私が、ある種の質問・疑問に答えないのは、そういう理由からである。

それ故に、そうした無用な問題に気をとられることなく、私が説いた教えの実践に集中するがよい。

これは「毒矢の譬え」として知られている話ですが、ブッダが如何に現実的、合理的な人であったかがよく伺えます。

あと2つ逸話を紹介しましょう。

シュラーヴァステイーという街に、ゴータミーという、貧しい家に生まれた一人の女性がいました。彼女は痩せていた（キサー）ので、キサー・ゴータミーと呼ばれていました。

結婚して、男の子を産みましたが、その子は歩けるようになるが早いか、あっけなく亡くなってしまいました。そこで彼女は、その亡骸を抱いて、「この子を生き返らす薬を下さい」と町中を歩き回りました。一人の男が彼女を哀れみ、「私にはそんな薬はないが、あなたの子供を救ってくれる師を知っているから、彼の許に行きなさい」と、ブッダ（目覚めた者）の居場所を教えました。キサー・ゴータミーは、ブッダの許に行き、敬意をもって、こう質問しました。

「町の人から、あなた様なら私の子供を救ってくださると聞いてやってきました」

「もちろん救えます」

「どうしたらいいのですか」

「白い芥子【からし】の種が一粒あればいい。ただしその種は、今までに誰一人死者を出したことがない家から貰ってきなさい」

キサー・ゴータミーは町中の家々を回りましたが、かつて死者を出したことがない家は見つかりませんでした。

日も暮れて、彼女が戻ってくると、ブッダは尋ねました。

「芥子の種は手に入ったかね」

「いえ、手に入れることができませんでした。どの家でも死者を出していました」

それを聞いて、ブッダはこう答えました。

「あなたは無知にも、子を亡くしたのはあなた一人だと思っていた。しかし、生きとし生ける者は、誰しも死ぬものである。これは普遍の理【ことわり】である」

キサー・ゴータミーは、この言葉を聞いて、生を授かった者にとって死は不可避であることに気づき、ブッダの弟子となりました。

別の状況でブッダはこうも言っています。

ある日ブッダは弟子たちに、こう質問しました。

「私の弟子も、そうでない人も、人は誰でも苦しみを経験する。では、私の教えを聞いた者と、聞かない者では、どこに違いがあるのか」

これに対して、弟子たちは返答に窮し、ブッダに答えを求めました。それに対してブッダは、こう答えました。

「私の教えをまだ聞いたことがない者は、苦しみに出会うと、取り乱し、歎き悲しんで、ますます混迷する。それは、あたかも、第一の矢を受けて、さらに第二の矢を受けるといふようなものである。それに反して、私の教えを聞いた者は、苦しみに出合っても、いたずらに取り乱し、歎き悲しんで、混迷することがない。それを、私は、第二の矢を受けず、というのである」

これは「第二の矢」という名で知られる逸話ですが、ブッダの現実的で、合理的なものの見方をよく表わしています。

ブッダのこうした教えが、日本ではどうして正しく理解されることなく1500年経ってしまったのかというのは、不思議でならず、残念ですが、現実です。ですから今、インドが生んだ最大の思想家であるブッダという人が何を説いたかのを、もう一度というより、初心に戻って検討してみることは、今日のテーマである日本における幸福を考えることへの一番の近道、もっともいい道だと思います。仏教という観点からすれば、日本人にとっては「問い直す【、、】」ではなく、仏教伝来から15世紀経って「初めて【、、、】問う」ことになります。これが、僕が冒頭で「問い直す」という表現に拘った理由です。

ご清聴有難うございました。（終）

* 両テキストは、ともに今枝由郎訳で『日常語訳 ダンマパダ ブッダの〈真理の言葉〉』、『日常語訳 新編スッタニパータ ブッダの〈智恵の言葉〉』としてトランスビューから刊行されている。

質疑応答

Q. 講演ありがとうございました。今年の夏にブータンに行きました。5年前にブータンに行った友人が一緒だったのですが、その友人が、その時のブータンと今年のブータンがあまりにも違う、と言っていました。観光客に出す料理や、シャワーが綺麗になっている点や、ホテルの外観は一緒だけど、中が全然違う、と。今この国は、観光業と電力によって経済的に支えられているけど、私が一番驚いたのは、Wifi がホテルの中で使えたり、iPhone やパソコン、携帯電話も日本と同じくらいの普及率があるという状況で、非常にギャップを感じました。今日先生のお話された幸福と、日本の幸福とが繋がらないで、実感できないで帰ってきたまんまの3カ月だったものですから、今日伺って非常に参考になり、霧が晴れました。このあとブータンはどういう方向に動いていこうとしているのか、先生はどんな風にお考えになりますか？

A. 今おっしゃった、観光に力を入れる、観光立国。これが、ますます現実的で、唯一可能という認識が政府は強い。もうひとつの電力に関しては、これは当初のバラ色の見込みは逆転しています。今は完全に電力輸入国です。その理由は温暖化で、氷河湖が溶け始めるなどして、頼りにしていた水の供給が思うに任せなくなっています。これはブータン独自ではどうしようもできないことですが、ここまで深刻になるとは、ブータンが国家的な戦略を策定をしたときには予想もできなかった事態です。水力発電だけに依存できない中で、唯一観光は将来性があり、それに力を入れていることは確かです。ただそれだけでは国の将来は非常に難しい。そこで政府が何を考えて、政策的に行っているかというのは、僕には正直わかりません。例えば、昨日のどこかの地方紙ですけど、首都ティンプに登録されている5000台の公用車を2015年までに全部電気自動車に代える、という記事が載っていました。これは、新首相と日産自動車のゴーン会長との直接対話の結果、日産が1000億円投資して実現するという、かなり思い切ったプロジェクトです。現段階で、普通の国で普通に考えられていることから予測できない、危ぶまれるようなこともやってみる可能性がブータンにはあります。そういう状況ですから、僕個人的には、ブータンの将来像はわかりませんね。

Q. 先生ありがとうございました。GNHについて伺います。3つ質問を考えさせていただきました。提唱されたのは4代目国王ということだったんですけど、「あまり自分とは関係ない」という風におっしゃっているというお話でした。GNHという枠組みを作ってい

るのは、ブータン独自のものなののでしょうか？ それとも他の国の考え方が混ざっているのでしょうか？ 2つ目、国勢調査をやったそうなんですけど、どういう形で仏教の考え方が取り入れられているのか、わかりやすい例があればお願いしたいと思います。3つ目、仏教の考え方が取り入れられている GNH なんですけど、それはキリスト教徒や、イスラム教徒の国、その他の宗教の国でもよい指標となりうるのでしょうか？

A. 3点のうち、最初の GNH ということに関して、4代国王自身は、自分が云々、ということはありません。GNH の国際的認知度を高めたのは、国連の中で「GNH 大使」とも言われた、つい最近までブータンの首相であったジグメ・ティンレイの意気込み、努力です。4代国王はある時僕に、「あまりやりすぎないほうがいい」とおっしゃいました。GNH がブータン独自のものか、外国からの影響があったかということに関しては、外国からの影響は全くないと思います。1970年代ぐらいまで世界中が経済発展だけを目指していた中で、それに対する理論的な反論でも何でもなくて、ただ素朴な「田舎者」としての反発のようなものが出発点だったと思います。発展しても、幸せでなくなったら何になるのか、という疑問です。発展しながら幸福になれる道はあるのか、とか、幸福であるためには発展しては駄目なのか、といった理論的な詰めは一切ありません。出発点としては、他の国のように発展の名の下で苦しむ人、不幸な人が出てくることは避けた方がいい、という思いです。4代国王が、自分で国内を回って感じたことは、現時点で国民は不幸せではない、ブータンは農村社会として、生活状況は厳しい、だけれどもやっぱり、家族の絆とか、地域の絆というものがあって、自分が行き来する外国に比べて、今幸せである、と。だから、それを犠牲にしてまでの発展は意味がない、という非常に直観的なことだったと思います。

2つ目は、国勢調査に仏教がどう取り入れられているかということですが、国勢調査には、全部で200近く項目があり、調査には何時間もかかります。その中には、非常にユニークな項目があります。例えば一番典型的なものは、「幸福かどうか」という直接質問がありますが、それよりも特色があるのは「時間の使い方」に関する質問です。1日24時間を「何にどれだけ使っていますか」というものです。まあ世界的に、就眠時間とか、労働時間というのは似たり寄ったりで、各々1日の3分の1で、残るのがあとの3分の1の8時間です。働く時間に関しては、ブータンは他の国より短いと思います。就眠時間は、ブータンの人だけが3時間しか寝ない、ということはないので、ほぼ平均的な8時間です。そうすると残りの8時間ですが、まあ食事の時間とかを差し引いて、ブータン

で突出して目に留まるのは、「祈りの時間」です。全国民平均して1時間半くらいです。驚くなかれ、10代の学生、大学生でも、最低30分。年代ごとにやっぱり上がっていき、突出するのは60代以上。ほとんどの人は仕事を辞めて、日本でいえば定年退職して、その後は1日に3時間とか祈る人がいます。もちろん、職業によってはお坊さんとかは1日に3-4時間位お祈りしていますが、これは当然のことです。警察官、軍人かて、1時間位の人が多い。この祈りに費やす時間の多さは驚きですね。ビジネスマンも学生も。やっぱりこれがブータン人の人柄を大きく特色付けている要素のひとつだと思いますね。

3つ目はなんでしたっけ？

Q. GNHは、仏教国だけでなく、キリスト教徒やイスラム教徒とか、他の宗教を信仰している国にも適用できるでしょうか？

A. 原則的に適用できると思います。ブータンは仏教国ですけど、新しい憲法—これもほぼ4代国王の信念を反映しています—では、仏教を国教とは謳っていません。他の国では、ヒンドゥー教（例えばネパール）とか、キリスト教、イスラム教を国教とする国がありますが、ブータンはそう謳いません。新しい憲法の中での表現は、「ブータンはカーギュ派の精神遺産を受け継いでいる」、すなわちチベット仏教の一宗派であるカーギュ派の伝統を受け継いでいる、です。でもそのあとに「ブータン国王はすべての宗教の保護者である」と規定されています。ですから信仰の自由を前提にしています。なぜかという、宗教というのは、仏教であれ、イスラム教であれ、ヒンドゥー教であれ、すべての人間の精神的な充足、あるいは幸福への道筋であるというのが前提ですから、どの宗教は保護して、他の宗教は禁止にする、あるいは排斥するということはありません。ですから、ブータン国王は国家元首の義務の一つとして、すべての宗教を保護する、ということです。逆に言えば、仏教以外の宗教伝統、宗教遺産を柱としている国でも、自国の宗教とは異なる宗教に対しても寛容でなければならない、というメッセージだと思うんですね。

Q. 一度ブータンに行ったことがあります。レストランというか宿舎で、朝ごはんのときに、スタッフが祈りながらフォークを並べていた、というのを聞いて感動しました。泊まった村で、マニ車の中にお経があって、ぐるぐる回すと一回唱えたことになると。1日中ぐるぐる回しているおばあちゃんがいて、一緒に回したりしました。また経文が印刷された旗が1回はためいたら、お経を唱えたことになるとか。すごく祈りについて真剣とい

うか、合理的というか・・・。何が合理的なのかわからないですけど、ブッダの合理性というお話を聞いて、そういうのと関係あるのかと思ったり。あと何が人々を祈りに駆り立てるのか、そのあたりが聞きたいです。

A. マニ車にせよ経文旗にせよ、全部祈りのメカニズムですが、それがブッダの合理性と関係しているかどうかについては、ちょっと僕にはわかりません。ブータンの人がどうしてそれだけ祈りに時間や労力を費やすかという、やっぱり「自分」の認識、というか自分を世界の中でどう位置付けているかっていうところに関わってくると思うんですよね。ブータン人には、積極的に自然を変えていくとか、征服していくという態度がなく、科学的な進歩とかいうことにも消極的、受動的と言えます。彼らの世界観というか、自分をどういう風に見ているかという、やっぱり他の人、他のものに支えられているということだと思ってるんですよね。だから、自分が、人類が、という意識はあまりなく、人間そのものを自然界の生き物の中のひとつとして、かなり低い位置に置いています。人間が、他の生きものよりも勝れているとか偉いとは誰一人思っていない。例えば、土地に関して、皆土地は所有していますが、自分は借り手であって、持ち主とは思っていません。チベット人もそうなんですけど、土地には本来の土地の神様があって、自分は借りているだけだという意識があります。人間社会の約束事として、お金を出して入手して、所有主になったといっても、本当の持ち主ではない。農作物を収穫するという行為にしても、自分が自分の能力で収穫した、あるいは品種改良してもっとたくさんとれるようになった、そういう意識はあまりありません。やっぱり自然循環の中での恵みだと思っています。自分はただ単に管理しただけで、自分が作ったのものではない。収穫は、恵みであって、そこからやっぱり感謝の気持ちがあります。たとえば桃であれリンゴであれ、果物の初物が採れたとき、ほとんどの人が一番最初にすることは、それを植えてくれた自分のお父さんなり、お祖父さんとか、周りの人に感謝することです。そして同時に、来年も同じように桃、リンゴに恵まれますように祈ることです。そういう意識がものすごく強いんですよね。さっきも言ったように、積極性がないと言えば、積極性がないですよ。来年は今年よりも収穫を多くしようとか、品種改良しよう、とかいうのはあまりない。ある面では、現状に満足しています。そして、自分を前面に出す意識が薄い。希薄というより、ほとんどない。ですから、祈りがあるのです。

Q. ありがとうございます。9月に初めてブータンに行きました。ずっと憧れていて、

ついに行けたのですが、思っていた場所ではなくて、すごく驚きがありました。多分自分の中に「幸せの国＝楽園」みたいな思い込みがあったからじゃないかと思います。僕が思っていた場所ではなかったの、ますます興味が湧きました。10日くらいだったんですが、どんどんブータンのことが好きになりました。ひとつに、ティンプで空気が薄くて、着いてすぐ歩いていて、息が苦しくなるということがある。東京で暮らしていると、自分で意識しないで暴走するようなことがあるんですが、息があがっちゃって、止まらなきゃいけない。そういうところから、持続的に生きていくヒントみたいなものをもらったような気がしました。ツェチュというお祭りに行きました。大勢の人がいましたが、その中で12歳の女の子と喋る機会があって、英語がとても上手くて驚きました。これからのブータンの人たちが英語が上手くなるのが、いいことか悪いことかわからないんですけど。僕らは中学から高校までみっちり英語やりますけど、あまり上手ではない。なんで12歳の女の子があんなに上手に喋れるのか、というのがすごく不思議に思いました。「なんでだと思う？」と本人に聞いたら、「先生が大好きだから！」と彼女は言っていました。その子だけでなく、他の村でも英語が上手い子たちがいたんですけど、何か教育の違いがあるのでしょうか？

A. ブータンは教育、国語教育に関して非常に特異な制度があります。普通教育はすべて英語で行っています。国語であるゾンカ語の授業と一部の歴史の授業を除いてはすべて英語です。だから、英語がうまいというか、ほぼ母国語並みに全員できます。それが一番の理由ですね。それともう一つの理由は、やっぱり耳がいいことですね。ゾンカ語はチベット語系の言葉ですけど、音韻体系が日本語に比べればずっと幅が広い。ですから、ほとんどの音が聞き取れます。ですから日本人と比べれば、英語を聞きとる、真似する能力、柔軟性は抜群に高い。それがもう一つの理由だと思います。もちろん「先生が好き」というのも理由のひとつではあります。英語が上手いということのいい側面は、それに伴う国際性、英語での情報の収集力、理解力です。それと反比例して、一日一コマしか教わっていない国語であるゾンカ語の能力が低い。話すことに関しては一切問題ありません。というのは、日常生活でほとんどの人はゾンカ語を話しているからです。しかし、書き言葉となると非常に弱い。これがブータンにとっての一番大きな問題だと思います。それを日本人の状況に置き換えて説明するのは難しいですけど、例えば小学校、中学校で漢字をほとんど教えず、平仮名とカタカナだけ、いわゆる表音文字だけで、口頭で教えるとします。そうすると、高校を出ても漢字が読めない、新聞が読めない。ブータンの場合ですと、日

常生活には一切問題なく、困らないけれど、何かを読むとなったときには読めない。特に仏典が読めない。古典チベット語で書いてあるお経、それはかなりな数に上りますし、アジアの文学の中で、中国語、日本語、ヒンディー語、サンスクリット語に次いで4番目くらいに量が多く、内容的にも優れたものがあります。この古典から完全に断絶してしまっています。もちろん、お坊さんに直接聞いてお経を説明してもらおうということができますけれども、自分で古典が読めないという状況が確実に生まれつつあります。これはものすごく深刻な問題ですね。

Q. わたしはブータンに行ったことはなくて、来年2月に初めて行きます。エコツーリズムの仕事をやっています、色々なところに行っていますが、初めて行きます。ブータンとインドの国境あたりで野生動物を見に行きますが、今伺っていて、宗教上ブータンの方の野生動物に対する考え方についてお聞きしたいです。ブータン側は非常に保護が行き渡ってようですが、国境をちょっと越えたインド側は上手くいっていない、という話を聞いたことがあります。ブータンの人にとって生き物の考え方、そしてインドの人との関係、先生がお感じのところを教えてください。

A. マナスの自然保護地区は、インドとブータンにまたがりますが、以前からインド領内での状況と、ブータン国内での状況は違うと言われていて、これは現在でも変わりはないんだと思います。詳しいことは知りません。僕も一度だけ通っただけで、比較とかそんなことはできないんですけど、保護状況とかそういうことも違うでしょうし、やっぱり一番違うのは、殺すか殺さないか、ということの感性だと思うんですね。ブータン人は野生動物が生息する地域で野生動物を殺めたり、彼らの生態系に入ろうとはしません。インドの場合も、伝統的にはそれほど獵をしたりということはないんですけど、やっぱり利益を求めてトラやゾウや他の動物を捕獲したり、狩猟したりします。ブータン側にはないですね。違いはそのあたりだと思いますね。ブータンには管理体制というのはほとんどないですね。完全なジャングルに近いところで、人間が行き来したりはしないし、柵があって、標識があって、ここから先は保護区だとか、そういうことは一切ありません。

Q. 今日はありがとうございます。わたしは今枝さんの岩波新書『ブータンに魅せられて』を読んで興味を持って、今年西部のツアーに行っていて、つい先週、東の方のペマ・ガツェルの方へ行ってきました。ブータンも一様ではなく、東の方がどちらかというと、我々

のために豚をさばいてくれたりと、そういうことがあってずいぶん違うんだなと思いました。東のその辺で一様に学校がきちっとしていて、教育が浸透しているというのは感じました。その村の校長先生や村長さんと話したんですね。この村には8学年、中学校くらいまであるので、皆そこに行きますが、教育が上に行けばいくほど村から子供がいなくなる。一回いなくなると、帰ってこないという現状があって、それをどうすればいいのかというのが一番の問題だと言っていました。その村のことだけじゃないと思って聞いていました。確かに子供は英語で教育を受けて、情報も取りやすくなって、色々なものに興味をもつ。そうすると、都市に行きたくなくなるという自然の摂理かなという気がして、自給自足的な村の形から随分変わってくるかなということを思ったんですけど、そういうところのお考えをお聞かせください。

A. おっしゃる通りで、高学年になればなるほど村を離れます。まず村には学校が高学年までではなくて、大学も地方になく、都市部に行くことになります。彼らがいわゆる就職する段階になっても、地方には職がありません。高学歴であるほど、地方では職がなく、都市に集中する、これは大きな問題ですね。政府はこれを認識して、どうしたら地方に戻すことができるかということを探しているところです。しかし、なかなかうまくはいかないのが現状だと思います。地方に産業を分散するとか、考えてはいますね。しかし実際には特に首都に極度に集中しています。人口の2割近くは首都ティンプに集中しています。2割といっても、10万人ちょっとなんですけど、やっぱり集中度は高いですね。大きな問題だと思います。

Q. 今日はありがとうございました。私はこの春3週間くらいブータンとインドの国境にいました。山側のブータンの人と、ネパール系のブータンの人たちと色々話しをして、やっぱり違うんだな、という風に感じてきました。温泉に入って裸の付き合いで、本音の話が聞けたかなという気はしているんですが、実はひとつだけすっきりしない部分があります。客観的に見て、ブータン人は盗みをしないとか、人を殺したりしないとか、非常に日本人の情に近いんだな、と思って、特にインドの国境から入るとほっとするんですよ。しかしながら、なんでそんな人たちが10万人近いネパール系のブータン人たちを結果的には追い出したような形になってしまったのかと、いまひとつわからない。温泉に入っていて色々話しをして、男同士エッチな話とかもして、最後に「本当はネパール人のことどう思うの？」と聞くと、ほとんどの人が「嫌い」と答える。建て前と本音、みたいな部

分も感じたし、優しいのんびりとした感じの人たちなのに、差別というか、嫌悪感みたいなものがある、それがどうして出てくるのかな、というのが、いまひとつすっきりしませんでした。もしその辺の感覚のことで、先生がこんな感じかな、と思うところがあれば教えていただけないかと。

A. そのネパール系の住民の問題は、近現代ブータンが抱えるおそらく最大の問題だと思うんですね。それは全く不必要というか、そんなことが起きる必然性も必要性もなかった。けれども、とにかく1990年代に起きてしまった。その源は古く、イギリスがインドを植民地支配していた19世紀に遡ります。その時代にアッサム及びダージリンのお茶園を経営するのに、労働者が必要でした。インドは労働力は豊富ですけど、インド人は生まれた土地を離れたがらないので、労働力として移住させられません。ダージリン、アッサムあたりに移り住んで、お茶園で働くことに承諾したのは、唯一ネパール人でした。ネパール人は移動に抵抗がありません。かなりの数のネパール人が、お茶園での仕事に従事し、繁栄を支えました。彼らの中の一部は、お茶園のすぐ北隣の、誰も住んでいないブータン領熱帯林に徐々に移り住み、開墾しました。誰も住んでいない土地でしたから、ブータン人も別に文句を言いませんでした。

そういう状態が20世紀の前半まで続いて、第二次大戦後、1950年代に入って、さまざまな人が問題を指摘し始めました。ブータン国内において、ネパールの方がブータン人の人口より多いとか、半数を占めるとか。そういう中で、色んなことが起きました。ひとつには、ネパール系の政治家の策動です。つい最近までネパールの首相であったコイララが、最初にアッサム及びブータン内部で共産党に近い政治結社を作りました。ネパール人を結束させて、ブータン人に対抗させようと煽動しました。それが完全に成功したのは、ブータンの西隣のシッキムです。ブータンと同じくチベット仏教系の小さな王国であったところが、1970年代の中ごろには人口の過半数がネパール人で占められるようになりました。それでネパール側が結束して、王政打倒運動を起こして成功したのです。シッキム王国は、1975年にインドに併合され、終焉を迎えたわけです。その後さらにネパール系の人口が増えて、現在ではほぼ95パーセントがネパール系で、完全に「ネパール人州」です。グレーター・ネパール「拡大ネパール運動」という、政治家も加わった一種の乗っ取りです。

ネパールの国境の南側のインド領には、ネパール系人口が多い地域がいくつかあります。西ベンガル州のダージリンなどは、完全に「ネパール人州」で、「ネパール自治区」

となっています。この背景には、ネパールの人口爆発があります。ネパールでは吸収できないほどの人口増加があり、どうしても外に出ていく人が多くいます。そして、移り住んだインドあるいはブータンで、いつまでも少数民族でいるよりは、できるだけ自治に近い形を取りたいという気持ちを結束させ、政治的に策動する人たちがいます。そのとぼっちりが、ブータンのネパール系住民問題です。東ネパールに設置された難民キャンプは、ほぼ10万人を収容しましたが、実際にブータンを逃れてきた人たちは半数くらいですね。残りの半数5万人ほどは、インドにいたネパール系の人々が、難民認定を受けた方が得だからという理由で、難民キャンプに入ったと見なされています。その弁別が難しく、問題解決の一番のネックでした。ネパール、ブータン双方とも、区分けをする必要性に合意し、難民を4つのカテゴリーに区分けする作業に入りました。その間にネパール側が政情不安に陥り、ついには王政が終焉を迎える事態となりました。そういう中で2国間の交渉は進展しませんでした。結局10万人の「難民」を、1992年からつい最近までの20年間、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）が面倒をみることになりました。難民一人当たり1日5ドルの経費がかかったとのこと。ネパールやインドのこの地域で一人に1日5ドル使うというのは、かなりなことで、国連としても非常に負担になりました。実際にブータンから不当に追い出されたということが実証できない難民は、ブータンには戻れません。かといって、いつまでも難民キャンプに残すこともできません。結局は政治的配慮から、難民全員をブータンからもネパールからもインドからも離してしまうという解決法が採られました。こうしてこの問題は、国連史上最大規模の第3国定住プログラムによる解決となりました。今までのところ6~7万人が第3国に定住し、アメリカが5万人くらい引き受けました。あとの残りの3万人も他の第3国に受け入れられました。

これは本当に特殊な問題でした。本来難民というのは、不当な理由によって自分の母国・祖国から第3国に追い出され人たちを指します。ところがこの問題で「難民」とされたのは、ネパール系の人で、移住先であるブータンから母国ネパールに戻ってきた人たちです。それを歴史的な背景などを考慮せず、きっちりとした調査を経ずに「難民」と認定したのは、国連難民高等弁務官事務所の対処に問題があったと思います。

いずれにせよ、こういう問題が起きた後、今現在でもネパール系住民がいぜんとしてブータン総人口の20~30%を占めています。ブータンの総人口は70万人程ですから、20万近くはまだネパール系の人たちです。彼らはブータン国籍を持っていますが、ブータンに同化しません。宗教的に同化・改宗しないのは信仰の自由として認められるとして、ブータンの国語であるゾンカ語を話さない、話そうとしないというのは問題です。その逆

にブータン人はネパール語を話せます。ブータンが一番懸念しているのは、同族意識、帰属意識のない外国人を総人口の20～30%抱えるということです。国境の警備も実質上できていない状態で、4000万人の人口がいるネパールと地続きで、いつかて(?)密入国の可能性があって、それを止める術がない。これが、ブータンの存続、独立にとって一番現実味のある大問題です。

—以上で質疑応答を終了させていただきます。今枝先生、本日は本当にありがとうございました。

表記に関して

【、、】 = ルビ

写真① 今枝由郎先生



写真② 講演会風景



写真③ 質疑応答



写真④ 懇親会

